

■今後の防災対策と今後に伝えたいこと

山崎氏：想定を超える雨が降るようになるとダムを過信してはいけない部分もあるということだと思う。今後防災のためにどのような努力が必要なのか。過去の水害の経験をどのように活かすことをお考えか。

小山氏：市長になってから昭和57、58年の経験を活かし、まず防災行政無線を市内全戸に貸与し情報がすぐに伝わるようにした。その後水害ハザードマップ作成に取り掛かった。情報を市民に伝えることが大事だと思ったからである。有用なダムは必要。そして、地域の歴史をよく学ぶ必要があると思う。“あのお宮より下に家をつくらない”などの災害に関連する「言い伝え」を継承し、自分たちの身は自分たちで守るという心構えが大事である。

相模氏：情報共有の大切さを昭和44年の災害で実感した。この時、電話は通じなかった。伝達手段がないと、孤立し情報が伝わらない。当時、現地の情報が全く入ってこなかった。今後は、携帯が使えない時のために衛星電話などの備えが必要である。

大町ダム決壊したらという不安をもっておられる方がいるかもしれないが、先ほどのダムの構造の話、東日本大震災時の状況等を聞いて、私は大町ダムの決壊はありえないと断言していきたい。

伊藤氏：平成18年の豪雨の際には、犀川流域の発電専用5ダムの協力を得て、大町ダムと連携し特例的操作を実施したことで下流の越水を防ぐことができた。この操作をきっかけに、信濃川水系河川整備計画では「新たに洪水調節機能を確保することについて、調査・検討の上、必要な対策を実施すること」を位置づけ、平成27年度より大町ダム再編事業の実施計画調査に着手している。また、住民が自らリスクを察知して主体的に避難できるよう、実効性のある住民目線のソフト対策への転換も進んでいる。国、自治体、住民が災害情報を共有すること、住民は自分の暮らす土地の地形や大雨時に何が起こるか想定し、「自助、共助、公助」の立場にたって行動することが必要だと思う。

今後も堤防整備やダムの建設管理などのハード対策とともに、防災に必要な情報提供や改善を進め、皆さんとともに取り組んでいきたい。

山崎氏：ダムが水害にどんな役割を果たしているのか、普段どんな機能を果たしているのか、今回のシンポジウムを通じてよくわかったと思う。やはり今後の防災対策を考えるうえで、行政と住民、河川管理者と住民、あるいは観光業者などが、情報をどれだけ共有できるか、どれだけ危機感を共有できるのかが、大きな課題だと改めて強く感じた。



神秘の映像とトランペットの饗宴 — 夜空のトランペット in 高瀬溪谷・七倉ダム —



シンポジウム第2部へのプロローグとして、映像「神秘の映像とトランペットの饗宴 — 夜空のトランペット in 高瀬溪谷・七倉ダム —」を上映しました。

これは、平成27年8月30日に七倉ダム(東京電力HD)にて行われた、世界的デジタルアーティスト・長谷川章さんによるプロジェクションマッピングと日本を代表するトランペッター・近藤等則さんの演奏との饗宴の映像です。

夕暮れから夜闇へ移り変わる七倉ダムが光と音によって幻想的な空間に変化していくひとときを、場内の皆様に味わっていただきました。